

# 本教材を使用するにあたって

## 1. 「障がい」を理解することとは？

「この教材を手になされている先生方は「障がい理解」をどのように定義し、子ども達にどのように説明をされますか？」

「障がい理解」とはどのようなことでしょうか？

全国社会福祉協議会から1999年に発行された『ボランティアア・ラ・カルト「障害理解」プログラムの手引き』には、広義の障がい理解として、「障害そのものの理解からその障害とその人のあり方の一部として持っている障害者の理解、さらには障害者を取り巻く環境や社会のあり方、障害者に対する自己のあり方、サポートやコミュニケーションの方法なども含む総合的な障害の理解」と書かれています。

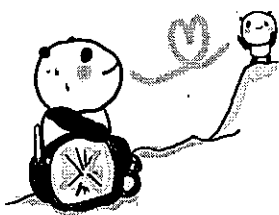
## 2. 障がい疑似体験の功罪

これまで多くの学校で障がい理解を行うプログラムとしてアイマスク体験や車いす体験などの障がい疑似体験が行われてきました。体験の目的としては、「見えない人や車いすの人の気持ちを理解する」、「見えない人の誘導方法や車いすの操作方法について学ぶ」、「障がいがある人の日常生活の大変さを学ぶ」等がよく見受けられます。

限られた時間での疑似体験で、このような目的を果たすことが本当に可能でしょうか？

目的が果たせたかどうかは、疑似体験を行った子どもたちの感想文（振り返りシート）を見れば一目瞭然です。そこには「〇〇が出来ない障がいがある人はかわいそう」、「私に障がいがなくて良かった」等、障がいを理解することとは正反対の障がい者を差別する感情が書かれていないでしょうか？

この原因は疑似体験のプログラム内容が障がいにより生じる「出来ない体験」で終始していることにあります。さらに疑似体験が上記のような目的を成し遂げるための一つの「手段」であるはずが、疑似体験することが授業の目的になってしまっています。



疑似体験を実施予定の先生方へ、  
体験することの目的は何でしょうか？

### 3.「同じ」ではなく、まずは「違い」を理解する

自分とは違う人の気持ちを知ることは至難の業です。障がい理解においても障がいがある人の気持ちを知ることは難しいです。障がい理解教育では気持ちを学ぶ以上に「障がい」そのものを学ぶことが大切です。ここでいう障がいとはお互いの「違い」であり、この「違い」を理解し合うことが、「共生社会」の第一歩です。

私たちは一人ひとり身長や体重等「違い」がありますが、社会は違いの多数派により作られていきます。障がいがある方とない方にも、身体的・精神的特性の「違い」はあります。しかし、社会は障がいのない多数派の意見や考えで作られていきます。その結果、少数派の障がいがある人たちの生活はしづらくなります。

例えば視力は人により異なる(老眼を含め)はずなのに、新聞の文字は社会を構成する多数派の見え方にもとづき製作されます。その結果少数派の視力に障がいがある人たちは、新聞が見えない又は見えづらいという状況となります。



### 4.「障がいを学ぶ」から、「障がいで学ぶ」

～お互いの「違い」から、「共生社会」を学ぶ場へ～

疑似体験はお互いの「違い」を追体験することにより、自分たちが暮らす社会のあり方について考える手段としては有効です。この体験の中で、常に障がいは個人に属するものではなく、社会の仕組みがその方を「障がいがある方」にしてしまっている視点を持つことが大切です。

社会の隅々から段差がなくなり、車いすの方がスムーズに移動できる社会が整えられると、その方の障がいはぐんと少なくなるのです。身体の障がいは何も変化していないのに……

障がい理解教育とはこのような障がい(違い)理解を通して、私たち誰もが住みやすい「共生社会」のあり方について考えるプログラムなのです。

この教材を手になされている先生は、障がいで何を子ども達に学ばせますか？